

## 〈書評〉

## 『評伝エーリッヒ・フロム』

ゲルハルト・P・ナップ著，滝沢正樹・木下一哉訳

新評論 1994年

## 沼田健哉

ゲルハルト・P・ナップは、はしがきにおいて、「本書『評伝 エーリッヒ・フロム』は、ごく一般の読者と専門家の両者にたいして話題を提供する。この本は、エーリッヒ・フロムの伝記，アカデミックな教師および精神分析家としての彼の著作，さらには英語で発表された彼の業績の全体についての初の大がかりな批判的評価として，ただ単にフロムを知ってもらうことを目指すだけでなく，読者が，今世紀のもっとも影響力のあった思想家の1人の遺産をめぐる論争に加わることを求めている。」と述べている。

このような記述からもうかがう事ができるように，当書は，本格的な学術書ではなく，アカデミックな研究のレベルからみると，マーティン・ジェイの『弁証法的想像力』や，ライナー・フンクの『エーリッヒ・フロム一人と思想』より低いといわざるをえない。

およそ，フロムのように，フロイトとマルクスという両大家の理論をふまえて，新たな理論構築を試み，かつ，現代社会の当面するあらゆる問題に取り組んだ人物の全体像を正確に捉え論評を行なうには，相当の力量の研究者であらねばならない。しかるに，筆者がみるかぎり，ナップは，マルクスと，フロイトの理解においても，世界の諸宗教に関する知識においてもフロムに及ばないので当書のレベルはそれほど高いとはいえない。したがって，筆者には，当書の内容のみに限定した書評を行なう事はたいして意味がある

とは思われないので、他のフロムの研究者の業績も参照しつつ、よりマクロな考察を行なうことにする。

ナップは、当書を、以下のような文章で終えている。「フロムのヒューマニストとしてのまた思想家としての偉大さが、彼の研究の学者としての中身の充実にあるのではないということだ。純粋科学の純化された空気と、複雑な哲学的概念構成という深遠な王国は、けっして彼の自然の生息地ではなかった。彼の偉大さは、最終的には人間性に対する揺るぎない信念にある。彼の信条は、世界はありのまま、変えることができるし、変えられねばならないという簡単な文に要約される。」

結局、ナップは、フロムは学者として偉大であったというよりは、ヒューマニストとしてより偉大であったとみなしているようである。しかし、筆者は、フロムは学者としても充分偉大であったが、ヒューマニストとして、いかなる天才でも解明が困難な課題に取り組んだが故に、文明批評家ともうけとられかねない言及も行なわざるをえなかった人物であったと考えている。

さらに、ナップは、フロムの宗教的背景の重要性を指摘しているのは慧眼であるが、東洋をはじめとする諸宗教に関する理解や知識がフロム以上に低レベルにあるので十分な分析がなされていない。しかし、フロムは1926年に正統ユダヤ教の信仰を捨てるが、生涯にわたって正統派ユダヤ教の教義の全般的な影響下にあり続けたというのは正確な認識といえよう。たとえば、フロムの主著の1つである『自由からの逃走』が、旧約の出エジプト記の強い影響下に書かれている。さらに、そのカルヴィニズム批判は、そのマイナス面の指摘においてある程度正統な点もあるが、やはりカルヴィニズムにおける神の愛の本質をとらえきっていないのも、ユダヤ教的教義の影響下にあったが故でもある。

さらに、ナップは、「フロムの著作をきわめて効果的で説得力あるものにしてしているのは、その論理ではなく、人類には不幸を脱して地上にある黄金時代を築く潜在力があるという、理性を越えた信仰である」とも述べている。

これに関連し、ナップは、フロムが死の直前のインタビューで、子供時代のユダヤ教とそれに固有なメシア信仰の内容について以下のように述べている事を記している。「幼い頃から、わたしを孤立と孤独から救ってくれたのは、預言者の観念、とくに次のような考え方でした。つまり、メシアの時代への希望、そう、最後には救世主がより良い世界を作り上げるだろうという希望でした。……このメシア信仰の主題は、二つの非常に重要なメッセージを含んでいます。第一は、人間性の完成を目指す宗教的メッセージ、つまり知性と宗教と道徳の規範のもとに生きることです。そして第二は現実世界の真の変革を目指す政治的メッセージ、つまりそうした宗教原理を実現する新しい社会の建設です。」

ナップは、明言していないが、フロムの生涯をふり返えると、この二つのメッセージを提示し続けた存在であることが分かる。ユダヤの民とは、イエスをメシアと認めず、やがて来るとされるメシアを待望し続けている民族である。それが故にキリスト教世界から疎外されてきたが、タルムード等の学習の幼時期からの奨励と、いわゆるマージナルマンの立場に置かれたという二つの要因により、多くの大天才が輩出し、ユダヤ人の枠を超える人類のメシア的人物を多数生ぜしめるに至っているのは、思えば、歴史のパラドックスともいえよう。

そして、フロムも、そのような存在の1人として位置づける事も可能ではなかろうかというのが当書を読んだの筆者の感想である。さらに、フロムに多大の影響を与えたマルクスの家族は、マルクスが六歳の年に、家族一同がキリスト教に改宗し洗礼を受けたという。しかし、改宗の動機は、宗教的というよりは、むしろ経済的・社会的なものであり、宗教的には、マルクスの父は、ユダヤ教を棄てたとか、キリスト教を信奉するようになったとか、言うことは難しいと、E・H・カーもみなしている。しかし、カーがマルクスを人種的および宗教的な意識を全く脱し得たところの稀有なユダヤ人の1人であったとしているのは問題点がないわけではない。マルクスは、ギムナ

ジウムで学んでいるが、今日残っている試験答案の中で、先生から最も無条件的な賞讃を勝ち得たものは、「ヨハネ第15章第1——第14節によるキリスト信仰者の同盟について、——その起源および本質、その無条件的必然性およびその結果において叙述す」であったという。この事実は、一見反宗教的とみなされがちであるマルクスの理論がいかにか、ユダヤ=キリスト教的伝統に強く拘束されていたかを示唆するものといえよう。そのような視点からするならば、マルクスとフロイトは、若干の差異はあるものの共通の宗教的伝統のもとにその学説を構築し、運動を展開したといえる。

しかし、ナップが指摘するように、異議申し立てこそが、フロムの生涯を貫くエネルギーであり、顔のみえる社会主義（ヒューマニスト・ソーシャルイズム）が信条であった人間にとっては、いずれの組織も安住の地とはなり得なかった。この点、マルクスとは差異があるといえる。

さらに、このようなフロムの性格や信条は、アメリカ社会党のような政治組織のみならず精神分析界からも除名されるという結果を生ぜしめる要因ともなっている。この点に関連し、ナップが、神秘主義と性の融合は、フロムを「彼が思っている以上にユングに近づける」というハウズドルフの見解を正しいとしているのは、慧眼といえる。

フロムは、筆者からみると一面においては、やや矛盾した存在にみえる。なぜなら、彼の宗教に対する積極的評価はむしろユングに近いともいえよう。しかるに自身を、「言わばフロイトの弟子であり、その理論の紹介者だが、フロイトのもっとも重要な発見を、やや狭いリビドー理論から解放することによって、それを実りあるものとし、より深めようと努めている人」と見られることを好んでいたからである。

その認識自体は誤っているとはいえないが、こと宗教に限定して考察すると、『精神分析と宗教』等で展開されているユングとフロイトの宗教観に関する言及は、フロム自身の宗教観を語っており、ユングとフロイトのいずれの宗教観をも歪めているといえる。いずれにしろ、精神分析の正統派からみ

ると異端的存在であり除名は必然的に生じたといえる。

さらに、フロムは、宗教を権威主義的宗教と人道主義的宗教に分類している。このような分析に対し、ナップはくり返し批判しているが、やや説得力に欠けるように思われる。これに対し、作田啓一はより高次の批判を展開している。作田は、フロムの二分法は静態的なものにとどまっており、例えば、バイオフィラス（生を希求する）対ネクロフィラス（死を希求する）という二分法にも限界があるとする。

作田は、「生の追求の極みが死への衝動に転じたり、逆に死の追求の果てに生への渴望が甦るといったようなダイナミズムが、フロムの視界から除外されている。彼はそのような人間の心の不思議な力学に気づいていないのだろうか。いや、気づいていないはずはない。ただ彼は、この種の深淵を、しよせんは合理的なシンボルである言葉によって正確に表わすことの困難さに賭けるよりも、多くの読者に問題の所在を広く訴えることの意義の方に重要性を認めているのであろう。その意味で彼はどこまでも啓蒙的な思想家である」としているが、これはやや好意的にみてのことであろう。あるいは、作田の人間現解の方が一面ではナップやフロムより深いというみかたも可能である。

ナップは、くりかえし、フロムの仏教への傾倒について言及し、晩年ほとんど仏教徒として暮らしたと述べている。しかし、『禅と精神分析』を読むと、筆者のように仏教に関し低レベルの理解しか有していない者からみても、その仏教に対する理解は浅くややピントがずれているのではないかという印象を受ける。これは、マックス・ウェーバーが、自己を宗教的音痴としつつも、東洋をも含めた世界の諸宗教に深い理解をもち、鋭利な分析を加えているのと比較すると、研究者としての力量の差は歴然としている。フロムは、フロイトを発展させたとしているが、その内容をみると、すでに批判されているように、フロイトが内包していた社会批判の視角をむしろ弱めているという側面がある。しかし、その一方では、マルクスとフロイトの双方が有し

ていた理論の弱点を克服し発展しその延命に貢献している人物であるということはいうまでもない。しかし、筆者は、とくにフロイトの場合古い科学的パラダイムにもとづき理論を展開している側面が強いとみなしている。

ところで、以下、ややナップの当書をはなれて、フロムの社会心理学者としての位置づけを試みたい。現在、社会心理学は重大な危機に陥っているとされるが、その大きな要因は、重箱の隅をつつくような瑣末主義とジェネラル・セオリーの欠如に帰せられる部分がある。この点に関連し、山岸俊男北海道大学助教授・ワシントン大学準教授は、『社会的ジレンマのしくみ』のあとがきにおいて以下のように記している。「筆者が社会心理学の研究を志したのも、個人の考えていること、望んでいること、喜び、哀しみ、憎しみ、つまり個人の生活の様々な問題が、どのような社会全体の問題とつながっているかを明らかにしたいと思ったからです。1人1人の人間が、これは自分の個人的な問題だと思っていることが、実はこんなかたちで社会全体の問題を映し出しているのだということを明らかにすることに、社会心理学者の役割があるのだと考えていました。20年後の今、筆者は社会心理学の現状に失望しています。社会心理学の潮流は、心理学・特に認知心理学へと、怒濤をうって傾斜しつつあるように思われます。極端な言い方をすれば、社会心理学は社会的認知研究と同義語になりつつあるとさえ言えるでしょう。社会的認知研究とは、人々が社会現象や、対人関係をどのように『情報処理』するかを明らかにしようという研究です。……このような研究の発達にもかわららず、筆者が現在の社会心理学に失望しているのは、社会的認知研究の底にある『孤立した情報処理機械としての人間観』に対してなのです。そこには、個人と社会とを理論的に結びつけようという、かつての社会心理学を駆り立てていた壮大な『野心』のかけらも残っていません。筆者がここ数年にわたって考えているのは、どのようにしたら社会心理学のなかに『社会』を復活することができるか、ということです。……今、我々がしなくてはならないのは、個人の意図とは別に、ある行動がどのような社会現象を生み出すかを

明らかにするための理論をつくることだと、筆者は考えています。……個人は社会環境に影響されながら考えたり、行動したりしていますが、その社会環境を（多くの場合、意識しないまま）作り出しているのは1人1人の個人なのです。個人と社会を結びつけるこの2つの側面を十分に理解されて初めて、社会心理学はその当初の目的を達成できるのだと、筆者は考えています。」

以上の見解は、なんら新しいものではなく、社会心理学のごく基本的な前提であったはずであるが、それさえもほとんどなされなくなっているという事態が、世界的にみられる社会心理学の危機なるものの最大の要因といえよう。ある社会心理学者は、筆者に、現在の社会心理学から数字を除いたらきわめて貧弱であると述べた。さらに、ある高名な社会心理学者は、社会学を専攻する子息に、「社会心理学は思想と哲学が弱い」と言われたという。このように、社会心理学の現状は問題点が多いが、プリコジンの散逸構造論、カオス論、秩序形成論の視点からみるならば、現在のゆらぎや混沌は、新たな秩序形成、すなわちより高次のレベルへの発展のための過程であるというみかたもできよう。

これらの社会心理学の動向と比較するなら、フロムには、哲学も思想もあり、さらに重箱の隅をつつくような瑣末主義からは縁遠い存在といえることができる。したがって、それなりの評価がなされてしかるべきであるといえよう。

しかし、現在、近代合理主義がある種の限界につき当たっているというみかたもされているが、フロムもその有力な一員であるフランクフルト学派は、デカルト等の古い世代の合理主義はある程度乗り超えていても、近代合理主義の枠内にあるといえよう。筆者は、その近代合理主義の枠を超えた理論構築が現在においては必要となってきたとみなしている。そういう視点からみると、ユング心理学、トランスパーソナル心理学、グレゴリー・ベイトソンの研究、プリコジンやハーケンらの既存の科学の伝統と連続しつつ新たな

な地平線を開拓しているニューサイエンス、さらには、既存の科学との断絶がより大きいニューサイエンス等は、多くの示唆を与えるものといえよう。それ以外にも、ニクラス・ルーマン等のシステム理論も多くの可能性を内包している。日本人の研究としては、村田晴夫の試みは今田高俊等と同様、多くの可能性を秘めており今後の理論的展開がきわめて注目される。

これらの研究と比較すると、フロムの試みは、既存のパラダイムによっている場合が多いのでその将来における有効性には一定の限界があるように思われる。しかし、フロムの人類史的課題に取り組まんとするヒューマニズムと意欲には、人々の心を打つものがある。

フロムは、超一流の社会学者ではなかったかもしれないが、彼の著書は読者に多くの生きる希望を与えかつ勇気づけてくれた。その事実だけでも、フロムの80年の人生は有意義であったということができよう。そして、その業績をふまえつつ、微力ながらも社会に貢献するために可能なかぎりの努力をしていきたいというのが、ナップの当書を読んでの筆者のいつわらざる心境である。

当書は、ある意味ではフロムの存在と類似している。それは、フロムの全体像を描くという、とうてい一冊の本によっては不可能な事をくわだてているが故に、内容はやや一貫性に貧しく学術的にはそれほど高レベルの著書とはいえない。しかし、それは、ナップがはしがきに書いているように一般の読者をも対象としているからでもあり、フロムという人間とその業績の全体像を一定程度把握するには適した内容となっており、啓蒙的意義の大きな本といえよう。